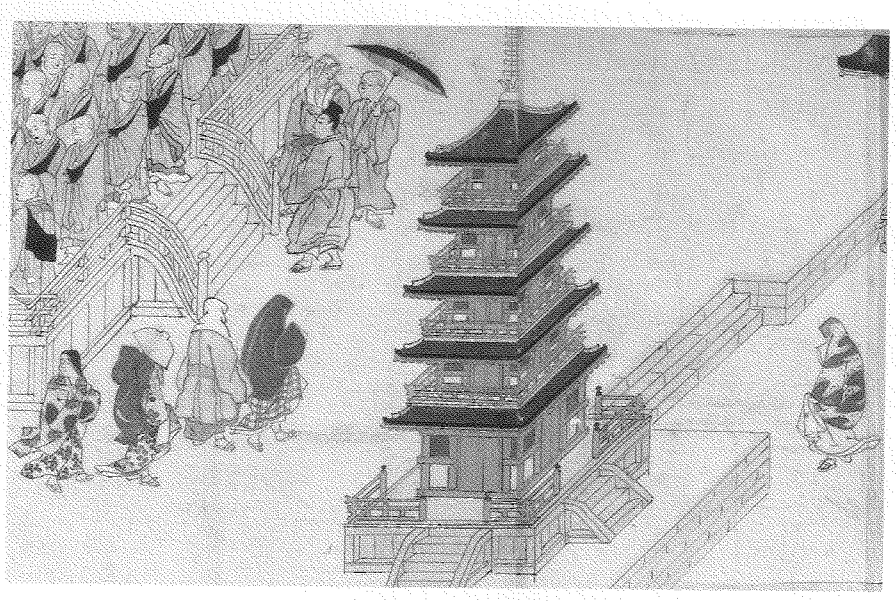
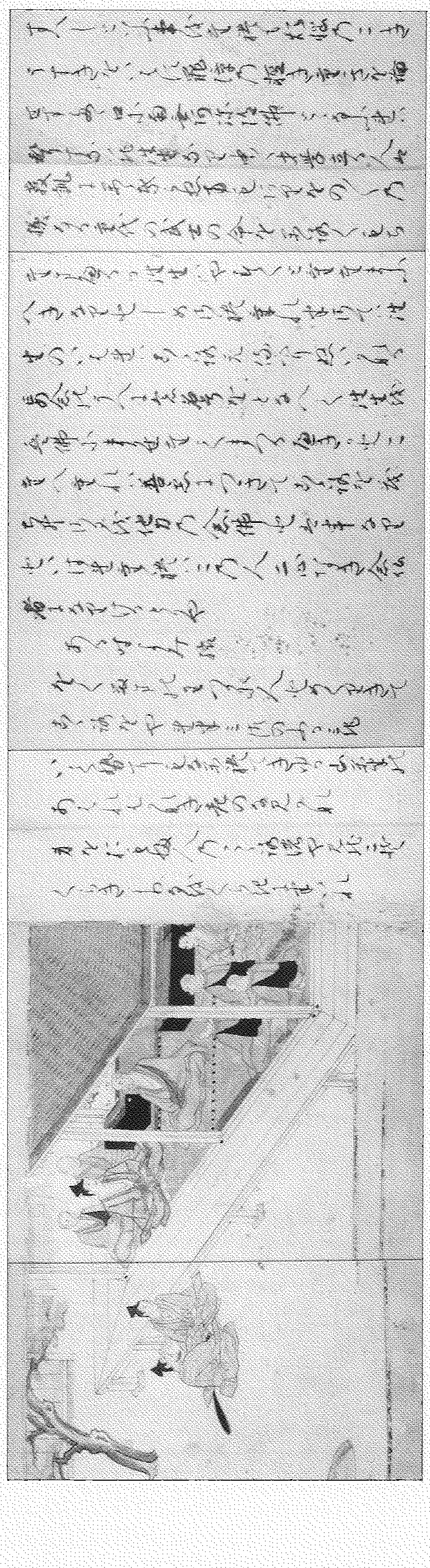
べっぷの文化財

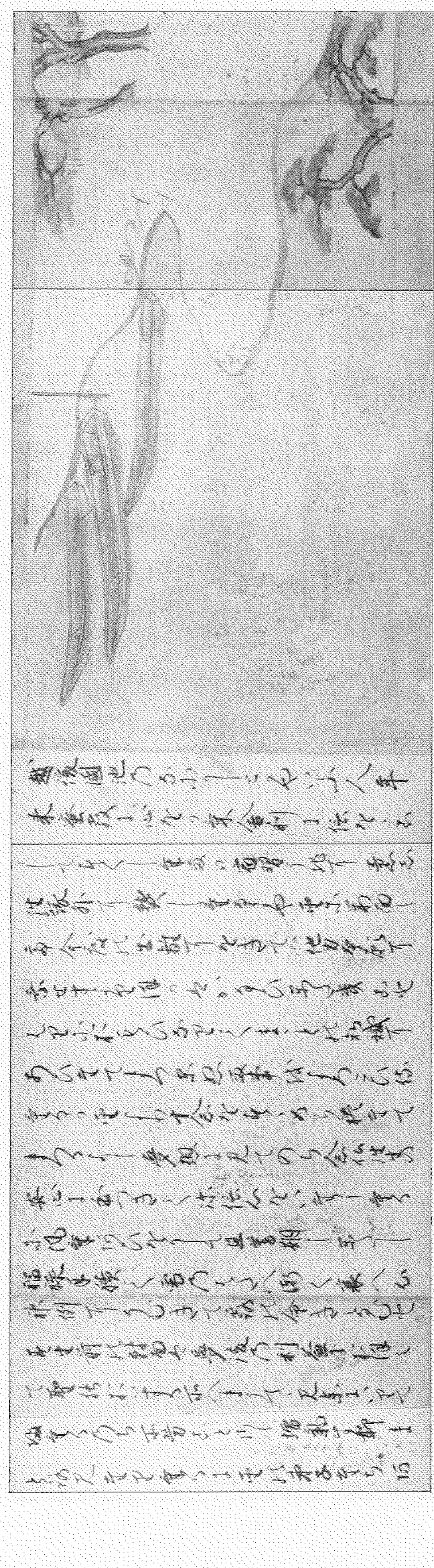
No. 21
平成２年３月

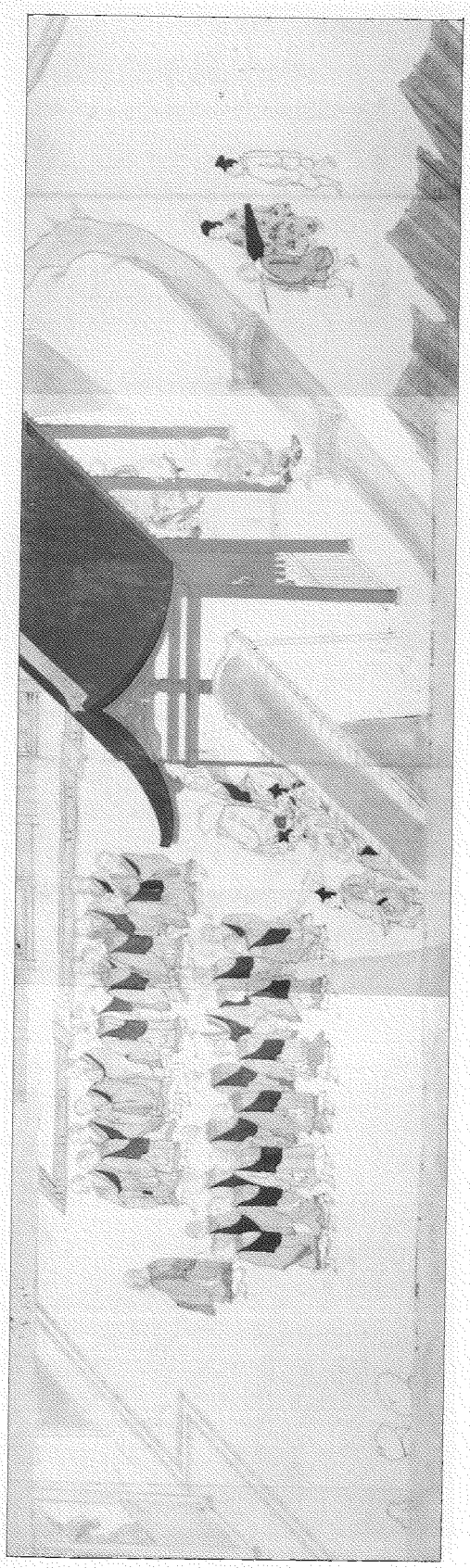
―― 永福寺蔵遊行上人絵巻 ――

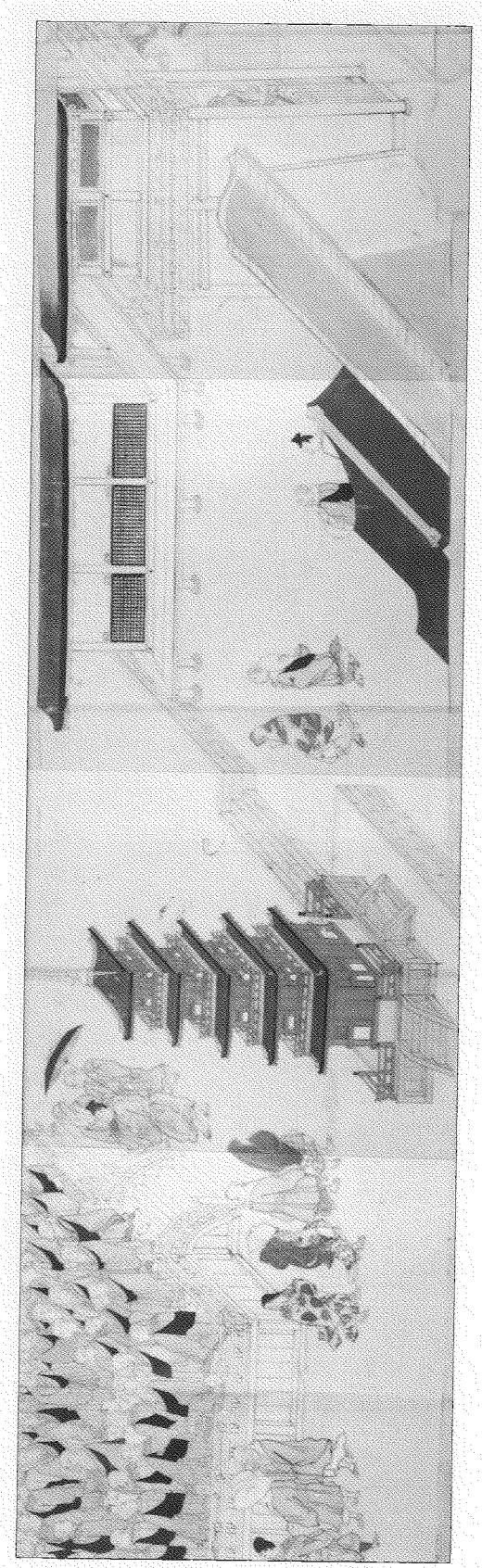


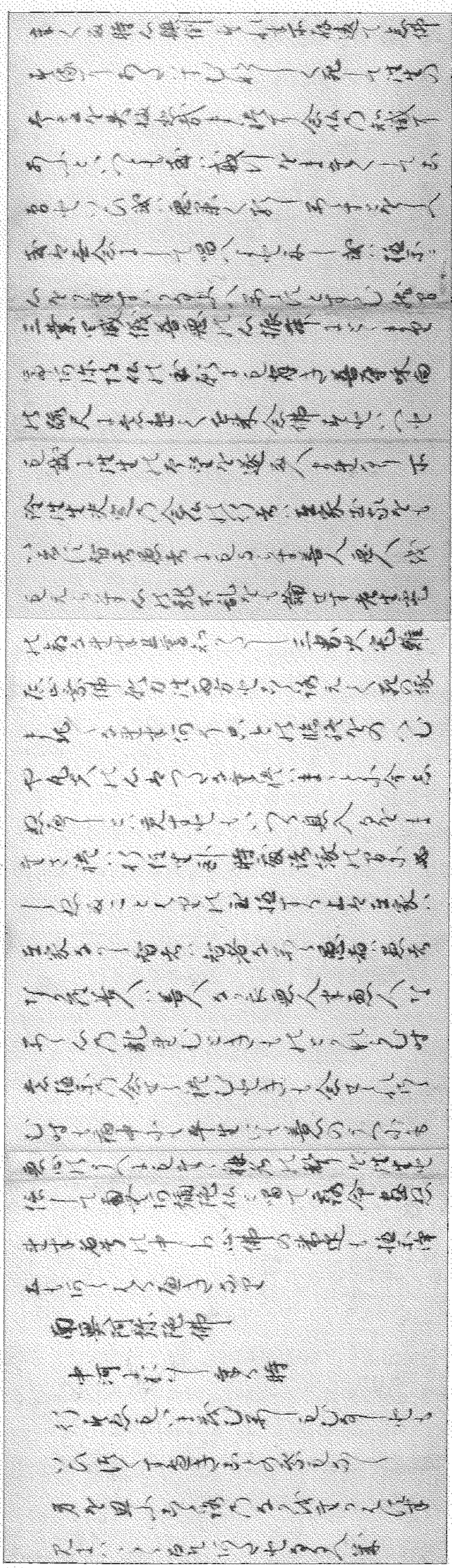
別府市教育委員会
別府市文化財調査員会

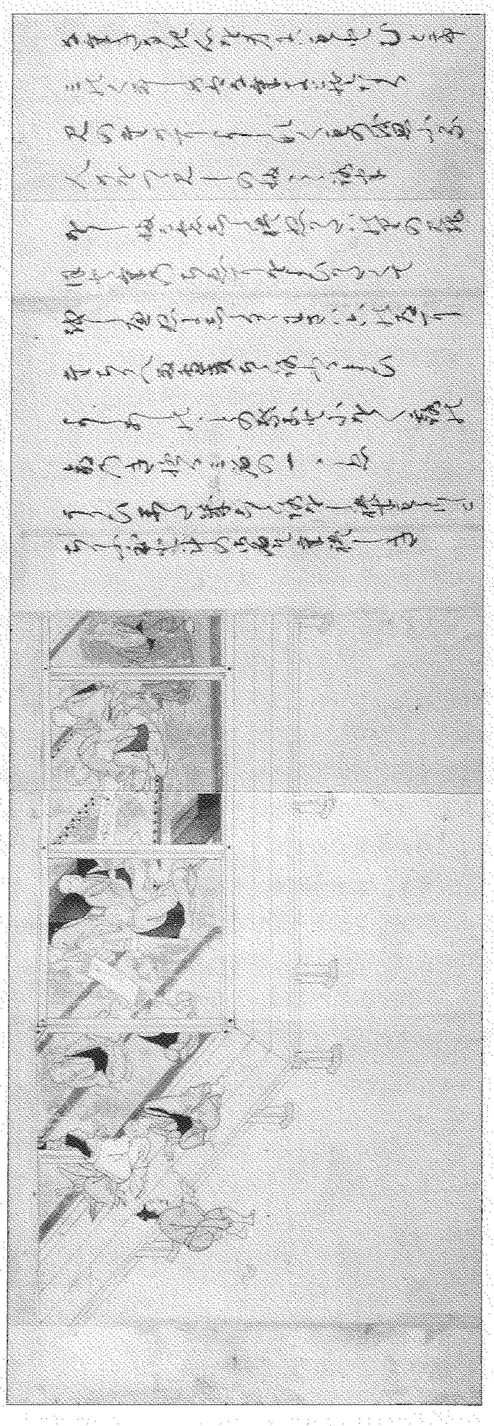












永福寺蔵遊行上人縁起絵巻

紙本着色　縦31.5×横1497.6センチメートル

一遍や他阿をはじめ時宗の中心になる上人は代々遊行上人と呼ばれているので、近年はこの種の絵巻を「遊行上人縁起」と呼ぶことが広く行われている。

この「遊行上人縁起」は時宗では特に重要視されており、中世に転写された現存写本が十三本報告されている。ここに紹介する別府・永福寺蔵の一巻は、江戸時代の摸本と推定されていたが、調査の結果、その制作年代ははるかに遡るものと考えるので、この一本を加えることができ、中世の転写本は合計十四本を数えることになった。

さて、現存の諸本は画中にみる人物の扱い方やその観照の態度、建築物の形やその配置などに、共通した同異が認められ、それを整理して分類すると、少なくとも甲本系、乙本系、丙本系の三系統に分類することができる。甲本系は、もっとも広く流布したものである。

永福寺本をこの三系統の内に位置づけると、人物の表現法や基本的な構図法などから甲本系に属するものと推定される。また、永福寺本は巻七に相当するものであるが、この巻七を欠く残欠本としては、金光寺本、常称寺本、金台寺本、金蓮寺別本、大和文華館本があり、いずれも絵の作風や筆致が一見して異なるので、永福寺本と同本の存在は目下のところ確かめられない。

次に、永福寺本の内容は、十巻の内の巻七で、第一段の巻頭の詞書を三行分欠くほかは巻末の第六段の絵まで完備している。すなわち、

第一段　永仁六年、他阿武州村岡にて所労のため臨終を覚悟して時衆に教誡を書く。

第二段　越中国放生津にて南条九郎という武士、他阿に往生について問い、念仏者となる。

第三段　越後国の池某、所労の折りに、他阿の弟子に看病される夢を見て病気が全快す。

第四段　越後国鵜河庄萩崎極楽寺の契範内観房という学僧、柏崎に逗留中の他阿に法門を尋ね、帰依す。

第五段　信州善光寺に他阿の一行が七日間参籠し、中日の躍り念仏を仏前の舞台で勤行する。

第六段　甲斐国中河という所で、他阿、人々に和歌を書いて与える。以上である。

次に永福寺本の特色についてのべると、色彩はやゝ淡いが、描線は暢達そのもので、人物の表情を的確にとらえ、着衣などの柔らかい質感も描線でもってよく示していて、画家の並々ならぬ技量の程が察知される。しかし、画中の添景や人物の数が他本に比べて少なく、そこにある程度の省略が行なわれていることが推測される。これは摸本の場合、よくあることであるが、この絵にみる作風は鎌倉時代の絵巻の伝統を正しく伝えるものであり、特に、その描線の性格や人物表現からみて、本絵巻の制作は、南北朝時代と推定できるのである。

(古美術　三彩新社　昭和61年発刊より抜粋)

＊監修

東京国立文化財研究所情報資料部部長　宮　次男

あとがき

今回は、紙数の関係で遊行上人絵巻の特集になりました。ご協力をいただきました永福寺に感謝いたします。

(文責　藤内喜六・入江秀利・小野一郎)

永福寺（鉄輪）

時宗。本尊は阿弥陀如来立像。縁起によると、建治2年(1276)に一遍上人によって開基されたという。いいつたえによると、当時この付近一帯は大地獄であったが、一遍上人の祈禱により地獄を鎮めて湯治場にしたといわれている。江戸時代には、松寿庵と呼ばれた。

本堂に一遍上人の木像が安置され、毎年九月の彼岸に湯あみ祭がおこなわれている。

(別府市誌より)